

万国博覧会と中国

— 1904年セントルイス万博を中心に —

楠元町子

1. はじめに

19世紀後半から21世紀の今日まで欧米諸国を中心に開催された万国博覧会は、時代の最先端をゆく科学技術を展示するだけでなく、開催国や参加国の国際関係を反映し、その時代の世界像を示す場でもあった。欧米中心の「近代世界システム」に組み込まれた万国博覧会で、非西欧諸国はどのように位置づけられたのであろうか。

日本は、日本製品の宣伝と「国威発揚」の場として万国博覧会に積極的に参加し、欧米諸国に連なる文明国であるというイメージの形成に努めた。20世紀に至るまで中国は、欧米近代の世界観・人間観・自然観などを体現していた万国博覧会を白眼視しつづけ、それに対して何らの興味も関心も示そうとしなかった。¹

本稿は、列強による中国侵略が本格化した時期に開催され、中国が初めて正式に代表者を派遣し参加した1904年のセントルイス万博に着目して、遅れたアジアの一等国である中国が万国博覧会でどのように位置づけられたのか考察しようとするものである。

万国博覧会については、近年多数の研究がなされているが²、万国博覧会と中国に関する主なる研究としては、鈴木、久本の論文がある。鈴木は「万国博覧会と中国—1851-1876—」³と題された論文で、中国の関税局が万博の出品物収集を行うようになった経緯を詳細に考察しているが、中国が本格的に関心を示したセントルイス万博については論じられていない。久本は「セントルイス万博と清末中国」⁴の論文で、セントルイス万博の展示で中国が屈辱を感じたことが中国近代化の契機になったことを当時の中国の新聞・雑誌の記事から論じているが、米国人が最も興味を抱いた辮髪姿の中国人の姿が描かれていないなど、米国側から見た中国についての考察が不十分であると思われる。

これらの成果を踏まえ本稿では、日本国政府のセントルイス万博の史料、日本の新聞記事、中国の雑誌・新聞記事やセントルイス公立図書館所蔵史料等の分析を通じて、ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) の15世紀末に西ヨーロッパを「中核」として成立し、「中核」が「辺境」を経済的にも文化的にも従属させるという「近代世界システム」⁵形成のプロセスにおいて、万国博覧会が中国をいかに位置づけていたのか明らかにしたい。

2. 万国博覧会とアジア

1) 万国博覧会のはじまり

1756年の「英国産業博覧会」が最初の近代博覧会として知られている。この時代の英国は、

産業革命の黎明期にあたり、1764年ハーグリーブズの多軸紡績機、1769年アークライトの水力紡績機やワットの蒸気機関の改良など発明が次々となされた。産業革命の進行は、封建的な階級制度の確立した社会を変化させ、身分に関係なく人々が同じ空間に集い、自由に出品を競い、出品物を観賞し交流する機会である博覧会の成立を可能にした。

フランスにおいても、革命により専制君主制を打破した1798年に、パリで初の国営博覧会が開かれた。会期は僅かに5日間であったが大成功を収め、国営博覧会は1849年までに11回開かれ、遅れていたフランスの産業革命に大きな刺激を与えた。このフランスの成功により、欧米諸国は1808年のトリエステ博、1818年のミュンヘン博、1823年のストックホルム博と次々に国内博を開催していった。最初の万国博覧会は、工業力で圧倒的優位を誇っていたイギリスで開催された。⁶

1851年5月第一回のロンドン万博は「全世界の工業の大博覧会」(The Great Exhibition of Industry of All Nation)と銘うって開催された。主催者のアルバート公は、万国博覧会の意義を次のように述べた。「全人類が現在までに到達した発展の度合いを正直に問いかけ、その真の姿をえがきだすことであります。そして、新たな出発点を見出して、そこから万国が将来に向けて、さらに努力を重ねるようにすることである。」⁷万国博覧会は人類が到達した産業や技術、文化の展示だけでなく、開催国の世界像を表現する場でもあった。

ロンドン万博の会場となった「クリスタルパレス(水晶宮)」は、3800トンの鑄鉄と700トンの錬鉄、30万枚のガラス、60万立方フィートの木材を用い、イギリスの絶大な工業力を誇示した。会場の西半分がイギリスの展示場であり、西から中央部にゆくにつれ、カナダ・ノヴァスコシア・西インド諸島などの植民地となり、中央部が英連邦最大の植民地インドの展示場となる。東半分に中国、アラビアとペルシャ、トルコ、ついでスイス・イタリアとなり、スペインとポルトガル、次にフランスが広く占め、ノルウェーとスウェーデン、ロシア、そして最東端がアメリカ合衆国と展示スペースが割り当てられた。⁸その区分けをめぐり、スイスが小国扱いされたことに大いにむくれたように⁹、まさに展示の配置は当時の世界の勢力図であった。

イギリスは世界中のあらゆる物の展示を試み、会場の中央部に近い所に中国の展示場を設けていた。しかし、中国からは出品の予約はあったが展示品はなかなか送られてこなかった。そこで急遽イギリス中から、個人や商店所蔵の中国製品をかき集めるという非常手段がとられることになった。展示場には骨董品とがらくたが並べられる結果となった。¹⁰ロンドン万博では、大英帝国の自治領や植民地から様々な物が集められたが、植民地の文化や風俗の展示でなく、あくまで植民地が産出する原材料や生産物の展示であった。

ロンドン万博は144日間の会期中に604万人の入場者を集め、20万ポンドの収益をあげた。ロンドン万博の大成功に刺激され、1853年ニューヨークで開催し、1855年にはフランスが5年ごとに開いていた国内博を中止して初のパリ万博を開催し、美術展を新設するなど、万国博覧会は規模を拡大していった。

2) 万国博覧会にみる世界像

1867年のパリ万博では、すべての展示を部門ごとに同心円状に配列し、出品国ごとに放射線状に分割していった。またフランス政府は主会場のほかに参加国に独自のパビリオンを建設す

ることを勧め、その結果、100以上もの異国情緒あふれるパビリオン郡が林立した。これによって見学者は会場内を歩くことによって「世界」を一周することが出来た。この第二回パリ万博によって、全世界を格付けて並べていこうという帝国主義的な考え方が、万国博覧会の本質となり、以後の万国博覧会での展示方式に大きな影響を与えることになった。¹¹

日本の徳川幕府はナポレオン3世から正式に招請を受け、水戸藩主徳川斉昭の第十八子昭武以下二十六人を派遣した。パリ万博の計画を知った薩摩藩と佐賀の鍋島藩も出品したため、幕府、薩摩、鍋島の三者がそれぞれ日本国名を名のって参同する形になった。¹²日本の出品地区は中国、タイと共有であり、全会場の128分の1を展示場に割り当てられていたが、中国の出品物が少なかったため、日本が展示場の半分以上を使用した。¹³中国からは正規の客員や多少とも名の通った人物は1人も訪れず、「旗織の新鮮さと冠や服の華麗さ」で人目をひいていた広東の劇団の一行や中国パビリオンで中国の伝統的な衣装を身にまとい客に中国特産の茶を供していた数名の妙齡の女性、それに珍奇さ・異様さをいっそう際立たせ、客寄せに一役買っていた中国の「巨人」と「小人」が万博会場に見られた。¹⁴

1873年ウィーン万博は、明治政府が初めて公式参加し、パビリオンの敷地を提供され日本庭園をつくった。本館建物は楕型あるいは魚の骨格のような形をし、球形の地球を紡錘形のつなかりに切り分け、平面に展開した形をしていた。日本と中国は、その東の端に出品区が与えられ、西の端にはアメリカ合衆国が位置し、ウィーン万博の会場はまさに世界地図を表現していた。¹⁵

日本は、参同事務を太政官直属とし、参議大隈重信を臨時博覧会事務局総裁とし、帝国政府最初の事業として巨額の国費を費やして参加し、神社、神楽堂、鳥居などを模した日本館を運営した。オーストリアは中国にとってなじみがない国であったため、民間の商工業者から出品の動きが見られず、オーストリア政府からの外交的圧力もあり、清朝政府はウィーン万国博への出品業務を通関と関税徴収の業務を果たしていた中国海関（以後海関と略記）の統括者たる総税務司ハート（Sir Robert Hart）に委任した。これまでの万国博への中国の出品とくらべて、その数量・種類とも何倍にもなり、評価も高かったため、ようやくこれ以降1905年のリエージュ万博まで海関が万国博覧会への出品業務を行うようになり、主催者側が納得できる出品がされるようになった。しかし、中国国内では外国人が出品物を収集し、万博に展示することに反対する勢力もあった¹⁶。

上記に見られるように、1870年代の万国博覧会では、日本と中国は東洋という一つの区分で展示場を与えられていた。中国は万国博覧会に無関心であったが、日本は欧米諸国と同等な位置を得るために積極的に関与して行った。19世紀後半から20世紀初頭にかけての万国博覧会では、各国の展示スペースの面積と位置は国力のパロメータであり、世界におけるその国の地位を示していた。万国博覧会の展示場は、開催国が参加国の要望を聞き、展示場の配分を決定していたので、展示の場所取りは外交によって大きく変化した。開催国から正式に各国の政府に参加要請が発せられると、参加国は出品物の収集を始め、同時に、最も重要である展示スペースの獲得に以下のような外交努力が、長い時には2年以上もなされたのである。

3) 万国博覧会と展示スペース

1876年のフィラデルフィア万博では、開催1年前の1875年4月に、当時の在米公使代理・二

等書記官の小野二郎が、アメリカ政府に日本の展示面積を、当初の設定の7290平方フィートから11520平方フィートに広げるように依頼し、展示面積拡大に成功している。¹⁷

1893年シカゴ万博では、会場の中心部を占めたのは、「榮譽の中庭」と人工池を囲む古代ローマ風やルネッサンス風の白亜のパビリオンが並ぶ「ホワイト・シティ」であった。娯楽街の「ミッドウェイ」に建設された「民族的集落」では、「ホワイト・シティ」に最も近い所にゲルマン系やケルト系の集落が置かれ、通りの中央部にトルコやアルジェリアのようなアジア系の諸民族の集落が並ぶ。そして通りの西端にはアフリカの部族とアメリカ・インディアンが集落が配置されていた。この配置は人類の「進歩」つまり「未開」から「文明」への道を表していたのである。¹⁸ 日本のパビリオンは、「ミッドウェイ」と「ホワイト・シティ」に至る途中の「Wooded Island」（森島）に建設され、まさに日本の世界における位置を表象していた。この「森島」は博覧会会場の中央の湖の中に位置する樹木に覆われた美しい島であり、他国の人気も高かったが、手島精一の粘り強い交渉によって日本が獲得に成功した。¹⁹

1900年のパリ万博は40カ国以上の国が参加し、そこに列強の植民地展示も加わって、まさに世界の縮図の観を呈した。「アンヴァリッド橋からアルマ橋に至るセーヌ左岸には、各国のパビリオンが時代も様式も様々に立ち並んだ。一方トロカデロには緑豊かな中に植民地のパビリオン群が点在しており、ロシアや中国、日本のパビリオンもあって、まさしく「庭園の中の世界」が展開されていたのである。²⁰

日本は、開催3年前の1897年9月にフランス政府よりトロカデロに日本庭園を建築し、庭園内の特別館は「其の国風の建築にして定まりたる時代又定まりたる地区を顕すことを要する旨すること」の通知を受け取ったが、納得せず、欧米諸国のパビリオンと同じ「ケイ・ドルセー」に展示スペースを求めて再三フランス事務局と交渉した。日本は、「原来「トロカデル」ハ植民部ニシテ諸大国ノ特別館ハ何レモ「ケイ・ドルセー」ニ建築スルモノナルヲ以テ本邦独り他ノ部分ニ於テ其ノ特別館ヲ建設スルハ甚ダ遺憾ナル」ので、欧米諸国と同様に「ケイ・ドルセー」に展示場を与えるか、「トロカデロ」ならば面積を3倍に拡大してほしいとフランス事務局に請求した。²¹ 交渉の結果すべての展示場所が確定したのは、1899年の4月であった。「ケイ・ドルセー」はすでに他国に分割してあり、また「トロカデロ」の地区での拡張もできないというフランス政府の回答により、日本は遺憾であるが「トロカデロ」に日本館と日本庭園を建設したのである。「トロカデロ」庭園内に独立国で特別館を建てたのは、日本と中国、トランスヴァールの三カ国に過ぎず、ロシアやオランダは特別館を建てずに植民地館のみを建てた。また日本は初めて台湾総督府の出品を行うなど、帝国主義的意識があったが、中国と日本はフランス政府にとって植民地と同等の位置であったようだ。

清国特別館は「トロカデロ」宮殿より「シャン・ド・マルス」に向かって左側露領亜細亜館の後方に位置し、本館は五棟の広大な建築より成っていた。一棟は北京城郭の九門の一つを模造した四階建てで、階上に登れば「セーヌ川」の流れを眺望できた。また他の一棟は、万里の長城を模設してあり、人目を引いていた。特別館には、五穀を主として、茶、象牙細工、陶磁器、風俗を示す模造人形などが陳列してあった。本館とは別に、北京の夏宮に似した建物と小形の支那風の建物を建築し、販売店としていた。日本から見れば、これら特別館は広大な庭園の中に点在し、建築の壮麗さで日本の特別館は数段劣っているが、設計を事務館長のフランス

人が担当したためであり、出品物は経費が十分でなく骨董に過ぎなかった。²³

また朝鮮が、1893年のシカゴ万博に続き、1900年のパリ万国博覧会にも出品していた。朝鮮帝国特別館は「シャン・ド・マルス」会場内土木部陳列館の後方に、朝鮮皇宮内にある謁見の間に似せて建築されており、内部は一つの大広間でそこに出品物を展示してあった。重要な物品は皇帝自ら選抜しパリに輸送し、朝鮮に滞在している仏人が所蔵している貴重品も出品されているが、「其ノ出品物と云ヒ又館内ノ構造ト云ヒ一モ進歩ノ氣運ヲ微スヘキモノナク。欧米人ハ云フモ更ナリ、本邦人ノ眼ヲ以テ之ヲ見ルモ一日其ノ劣等国タルヲ認ムヘク」しかし、日本の臨時博覧会事務局報告では、「欧米人には識別不可能であろうが、すばらしい書籍を出品している。」²⁴と古代朝鮮を評価し、欧米人には理解できない高度な文化が東洋にあるという優越意識が見られた。朝鮮は1904年のセントルイス万博では、早くから米国の参同要請に対して参加を表明していたが、日露戦争が勃発した直後に参加を取り消し²⁵、これ以降の万博にも参加していない。万国博覧会は、主催国から外交ルートによって国に参加要請がくることから、19世紀初頭から朝鮮が独立国の地位を失っていったと思われる。

中国の物品は、いままで述べたように1851年のロンドン万博以来、常に出品・展示されてきたが、当時の清朝政府は万国博覧会に関心をもたず、万国博覧会を「賽珍耀奇」で無益の行いと見なし、万国博覧会そのものを白眼視し続け、参加することに何の意義も必要性も感じていなかった。²⁶このような中国が、1904年のセントルイス万博に清朝宗室のひとりである溥倫勅具（Pu Lun）を博覧会の正監督として派遣する決定をしたのは、「近代世界システム」に中国も組み込まれつつあったからである。

「近代世界システム」は、15世紀末に成立した「西ヨーロッパ」を中核とした「資本主義的」世界システムであり、「中核」と「辺境」及び「半辺境」から成り立っている。「中核」とは、「辺境」との間における巨大な分業体制を利用してシステム全体の経済的余剰の大半を占めている国であり、両者間の貿易は、「中核」の工業製品と「辺境」の原材料・食料の交換という関係になり、「辺境」は低開発化が進んだ。²⁷「中核」と「辺境」の格差を正当化し隠蔽する役割を果たしたのが、人種差別のイデオロギーであった。利益の配分にこのような地理的偏在が生じる大きな理由は、地域によってそれぞれに固有の社会的労働が成立したことにあり、それは民族集団の文化に由来する。²⁸つまり「近代世界システム」に組み込まれた地域において、「各民族の遺伝学のおよび永く続いてきた文化的特徴こそがそれぞれの民族が異なった経済的地位を占めている主要な原因」であり、経済的・政治的に抑圧されている人々は、文化的にも「劣っている」からそうなのだとされていたのである。²⁹

万国博覧会の植民地展示は、「近代世界システム」を支えたイデオロギーである人種差別を正当化する役割を果たしていた。「近代世界システム」が地理的に拡張し、全地球が組み込まれると万国博覧会の植民地展示も拡大していった。1889年のパリ万博以降、自国の植民地の物品を展示するだけでなく、会場内に「植民地集落」が再現され、連れてこられた人々が「展示」されていた。1904年のセントルイス万博では、社会進化論に基づいて人類が序列化され、娯楽街「Pike」、人類学部門、「フィリピン村」の三ヵ所でこれまでの万博を大きく上回る規模で、「人間の展示」が行われた。特に外交関係によって左右される万国博覧会に、中国がどのような経緯をもって参加したのだろうか。

3. セントルイス万博と中国

1) 中華思想と中国

中国には、「華夷思想」という世界観があり、欧米の条約体制とは異なる「朝貢体制」が古くから存続していた。世界は、その中心に位置して高い文化を誇る中華（中国）と、その周囲の野蛮な夷狄からなると認識され、中国周辺に位置する国々は、中国を宗主国とする属国と位置付けられ、属国の君主は中国皇帝に臣従することにより君主としての地位がはじめて承認された。属国の君主は、中国に定期的に朝貢使節を派遣し、朝貢品を献納し、中国皇帝からは絹織物などを「回賜」として下賜された。こうした朝貢に付随して、民間レベルの交易も行われていたのであり、欧米諸国の貿易とは異なる経済関係が成立していた。華夷思想に基づく朝貢体制は、その盟主たる中国皇帝の威徳を証明するものであり、満州族の征服王朝である清朝にとっては、中国支配の正当性の見地からも朝貢体制の維持は重要であった。他方、朝貢体制を支える華夷思想は、朝貢国においても君主権力を権威づける役割を果たしていた。朝鮮には「小中華思想」、ヴェトナムには、「南国意識」という華夷思想があり、徳川時代の日本には「日本型華夷思想」があったとも言われている。³⁰ 欧米諸国の東アジアへの進出は、東アジアの国際秩序を崩壊し、欧米の「近代世界システム」に東アジアを組み込むことになった。

中国の二度のアヘン戦争敗北の結果、1860年代以降、中国周辺の朝貢国に対して欧米諸国や日本の勢力が及び、中国の朝貢国のコーカンド・ハーン国は1876年ロシアに、琉球は1879年日本に、ヴェトナムは1885年フランスに、ビルマは1886年イギリスに併合された。これら朝貢国が列強に併合される過程で生じた戦争の影響もあり、中国は、1889年パリ万博、1893年シカゴ万博には参加していない。1894年の日清戦争では、西洋諸国でなく同じ東アジアの小国日本に敗れることにより、清朝中国の威信は大きく低下し、アヘン戦争以来、動揺していた朝貢体制は完全に崩壊した。中国は1900年の義和団戦争で、列強八カ国の連合軍（英・米・独・仏・伊・日・露・澳）により北京を占領され、列強による熾烈な利権獲得競争が展開されることになった。19世紀から20世紀にかけて、国家としての中国は西洋列強や日本によってその主権や領土を侵害されつづけ、中国を中心とする東アジアの国際秩序も崩壊を余儀なくされていったのである。

さらに清朝中国は、国内では征服王朝として革命の危機に直面していた。中国は国内において支配階級の満州民族と被支配階級の漢民族との間に民族矛盾があり、国外においては清国の愛新覚羅王朝が、その封建支配権を維持するために列強諸国と妥協外交を採っていた。³¹ そのため当時の国際的交流の場であった万国博覧会を無視し続けることが、できなくなったのである。

2) 万博への参加経緯

セントルイス万博は、米国がフランスからルイジアナ州を購買してから百年を経過したことを記念して1904年4月30日から12月30にかけてミズリー州セントルイスで開催された。アメリカ大統領マッキンレーは、1901年8月に世界各国に参同の招聘を発し、中国には1902年6月に博覧会会社のアジア・オーストラリア担当委員長ジョン・バレット（John Barrett）を勧誘のため派遣した。6月28日には、早くもジョン・バレットからルイジアナ購入博覧会協会あてに、

巨大な東洋の帝国の出展とPrince Chenの来米を伝える以下のような電報が届いた。「土曜日に皇帝と西太后は、公式会見を開き、皇帝は中国の参同を確証した。皇帝は、中国の博覧会理事の任命と出展の準備のための勅令を発した。」³²すでにバレットの電報の数日前6月24日には、博覧会総裁フランシス（David. R. Francis）は、ニューヨークから中国へ戻る予定の中国のPrince Chenをルイジアナ購入博覧会のゲストとしてセントルイスに招待していた。Prince Chenは、中国皇帝の兄弟で、エドワード王(King Edward)の即位式参列のためロンドンに行き、その後フランスで教育や文明、軍隊の視察をしていた。Prince Chenは、ヨーロッパとアメリカの両方を訪れた初めての中国の皇子であった。中国政府は、フランシス総裁の招待を受け、Prince Chenにセントルイスを訪問させ、博覧会の準備の調査を始めると発表した。清朝政府は、今までの万国博覧会とは比較にならないほど、好意的に米国の博覧会参同要請に応じた。

一方ジョン・バレットも中国各地を訪れ、中国の地方高官と積極的に交流し、熱心に博覧会への出品を勧誘した。³³ 広東省の米国領事は、ジョン・バレットの訪問を受けた中国の状況を以下のように国務長官に報告した。「1902年9月1日、ジョン・バレット氏は広東省の領事館に到着し、広東省と広西省のTe Sou総督とセントルイス博覧会での南支那の展示部分について一連の協議会を開いた。」その結果、Te Sou総督は博覧会の目的と中国の展示スペースを重要視し、「総督と中国人民は、米国民に深い賞賛、真実の友情、心からの謝意を抱いている」と述べた。さらに彼は中国の他の総督とも協力して、米国と中国の貿易を強固にし発展させるために、中国の工業製品や資源を包括的に示すような展示にすることを約束した。「広東省と広西省の商人と製造業者、その他すべての住民にできるだけ大きくてすばらしい展示物を収集する準備の開始する声明を発表すると述べた。」

また、中国福建省の米国領事は、Haus Ying Kue総督に対するジョン・バレット氏の訪問について以下のような報告を米国国務省に送った。「9月17日、バレット氏は陸軍の祝砲をもって迎えられ、最大の歓迎を受けた。バレット氏は博覧会の公式招待状を総督に渡した。」総督は、セントルイス博覧会が華麗、広大であり、すべての国の生産物を展示するよい機会であることを理解していた。そして、仏領ハノイで1902年に開催される東洋農工技芸万国博覧会のために準備したすばらしい展示物をバレット氏に見せ、彼はセントルイスへもっと良いものを送ることを約束した。領事は、バレットの中国訪問は優れた成功を収め、「中国と米国の友情に基づいて多くのことが自由に討論され、中国の高官は、米国の友情、1900年の義和団事件以来中国に与えてきた米国の援助に対して大変強い謝意を表現した。」と国務省に報告した。広東省の米国領事は、ジョン・バレットの中国訪問の後、博覧会において最大の展示物を作る予定の中国のために、中国の展示面積を拡大するために努力した。これらの報告から中国が米国に好感情を持ち、セントルイス万国博覧会に意欲的に参加しようとしている態度がうかがわれる。

中国の事務局は、溥倫勅具（Pu Lun）殿下を正監督とし、副監督として黄開申、米国人フランシス・カール（Francis A. Carl）、書記数名を任命した。中国の出品は初め、関税局が募集の事務を行なったので、二人の副監督は関税局員から選任した。中国政府の出品物は22の開港場及び四省政府が募集し、個人の出品物は中国人及び外国人44人が出陳し、その他に九の会社が出品した。個人の出品の管理は事務局が委任されたが、会社の出品はすべて会社の代表が

聖路易に派遣され自ら管理した。しかし、出品の運搬、陳列の費用はすべて中国政府の事務局が支出し賛同費は総額50万ドルであった。³⁴ 1904年4月30日の博覧会開会式には、皇族の代表者であり中国の出品責任者のPu Lun皇子が出席した。中国の皇族は日本の皇族と異なり、西洋式に服を改めることなく、辮髪に中国服であった。辮髪姿は米国で興味をもたれ、Pu Lun皇子が「Pike」を観覧している姿をスケッチした絵が、新聞に掲載されていた。³⁵

世界中から珍奇なもの、あらゆる人種を集めようとしていたセントルイス万博にとって、世界最古の歴史を誇る中華帝国の参加は、博覧会に華麗さと威厳を添えた。そのような中国の展示物は、以下に述べるように米国人にはエキゾチックな珍奇なものとして見られていた。

3) 米国での展示と反響

中国は政府館を建設し、心芸館 (Liberal Arts、中国では雑芸館と表記) と教育館 (Education and Social Economy) に出品した。博覧会参加国44カ国のうち外国政府館を建築したのは、イギリス、ドイツ、ブラジル、ベルギー、フランス、オーストラリア、アルゼンチン、中国、日本などの17カ国であった。中国は政府館建築に1903年8月に着手し、1904年5月6日に開館式を遂行した。政府館の入覧については各国それぞれ規定があったが、中国政府館は、日曜日の外は毎日中国事務局の発した入場券又は博覧会の通券を持つ者のみが入覧でき、日本政府館のように誰でも自由に見学できたわけではなかった。中国政府館は、英国館とベルギー館の間に位置し、純然たる支那風建築で彫刻の装飾に富む三棟よりなり、中央館は溥倫貝勒殿下の宮殿を模し、左右翼館は上海の英国建築会社が請け負った。米国の職工も用いたが、工作の大部分は本国より、大工4人、左官6人、彫刻師及び塗師各2人、造花師、裁縫師各1人を派遣し建築させた。特に人目を引いたのは、館前の小亭で、装飾が極めて人目を引き、館内の陳列品は総費用4万ドルを要し、家具を配置し支那貴族の居室の状態を示し、種類の工芸品を陳列した。³⁶ 典型的なアジアの一例であった中国政府館は、大変な人気で多くの入館者が訪れた。³⁷

心芸館には、象牙、木石の各彫刻、粗造の七宝などを館内二ヶ所に展覧していた。心芸館を見学した朝日新聞の記者は、次のように報告している。「清国は心芸館のみの展覧なので、工芸品、山林、漁業も一切の物品をこの館に集合したため、実際館内第一に見栄えある陳列」となり、「この館にて来館者の足を止める陳列は清国の部なり」³⁸ と、清国の展示品を賞賛している。実際は清国政府の出品ではなく、二つの陳列所のうち大なる所は某米人の資本に因る在香港清人が出品したもので、今一ヶ所小なる区域内には、売店的出品があり、これはアモイ人が個人としての出品したものであるが総て清朝政府の出品として取り扱っていた。

公式発表には、清国は心芸館のみに展覧しているが、実際は教育館にもわずかであるが出品していた。教育館の中国の展覧について、朝日新聞は次のように紹介している。「世界の大国として又教育の点においては世界の文明に率先したる清国」が、教育館に出展しているのは大いに喜ばしく、「出品の体裁中々見るべく大中小学校は総て写真に取りて額面となし、北京学堂の如きは模型の甚だ見事なるものを出品」している。しかし、清国の著名な儒者の人間大の人形は、制作拙く滑稽じみているが、来館者を引き入れる目的なら、「この人形は白人の目には大に面白き感じを起さしめ必ず清国の部に足を入れることを必せり」。³⁹

清朝政府は、Pu Lun皇子が米国の記者のインタビューに答え米国や万博の印象を話したり、

政府館で11月16日に西太后の70歳の誕生日祝賀会を盛大に開催したりするなど国際交流に努めていた。⁴⁰ しかし万博の出品をすべて日本人で完遂した日本と異なり、清朝政府が自ら出品物を準備せず、外国人に万博の展示を委任したことは、西欧諸国が抱く中国イメージに適した物品が主に展示される結果となった。中国の記者が「聖路易場会之國恥」という記事で次のように述べている。⁴¹ 政府館の展示品には、「纏足の靴やアヘン吸引器具など中国の野蛮を極める器具があり、外国人に揶揄され嘲笑われた。これは、出品物の収集を外国人の税務史に任せただからである。」

さらに欧米人の中国イメージを如実に表現したのが「Pike」の中国村であった。「Pike」は、万博の会場を内外に分ける境界部に細長い区画に、25の人種、6000の演技者、1500の動物など殆どの地球上の異相を集め、カイロの街、インドの帝国、日本の縁日の再現や、動物ショー、ボア戦争のショーなどが繰り広げられた大娯楽街であった。

「Pike」の中国村は、次のように米国の新聞で紹介されていた。「中国村には中国人の商人によって供給されたアトラクションがあり、そこでは中国の音楽を聞くことができ、宗教の儀式とシンボルの意味を説明するガイドがいる中国寺院や中国人が給仕するティハウスなどがあった。広い市場では歴代王朝下の中国で大昔からずっと同じ方法で働いている中国の商人や職人、塗装工、装飾者を見ることが出来た。絹職人は、何千年も昔の先祖が織地を紡ぐために使用していたのと同じ道具でせっせと紡ぎ、象牙彫刻家は小さな象や犬、猫を作っていた。中国の役者によって京劇が演じられ、中国服を着た警備員が構内の治安を守っていた。」⁴² 米国人にとって奇怪なことは、服を売るために商人がひっきりなしに大きな声を通行人にかけることであった。「見物人は、広東、福州、香港の中国人労働者のかん高いのろまな声を聞き続けさせられた。」⁴³ そこには、服装、生活様式、技術すべてに於いて何千年も変わらない中国が再現されており、未開の地と同様な騒々しい世界が繰り広げられていた。米国人にとって、中国は欧米と異なる習慣を持ち、停滞した国というイメージがあった。このように中国の文化を野蛮で遅れたものとみなす米国人の見方の背景には、米国の新聞に移民法の執行前に逃亡を図る中国人の記事が度々掲載されるなど中国人排斥の動きがあった。

当時米国は、移民の入国を制限していたため外国人労働者の米国への上陸には厳しい条件を課していた。米国政府は、博覧会への諸外国の参同を得るために、博覧会の為に外国より来る労働者の入国に関する取扱を寛大にする規則を發布した。しかし、最も排斥運動が行なわれていた中国人に対しては、「支那労働者ノ上陸ハ米国移民法ノ嚴禁スル所ナレトモ博覧会ノ為ニ来ル者ニ対シテハ特ニ上陸ノ際保証金ヲ提供セシメ会場内ニ住居シ閉会后一ヶ月以内ニ帰国スルコトヲ条件トシテ」入国が許可されていた。⁴⁴

1904年11月17日には「移民禁止法から逃亡を図った中国人を収容している中国村は厳しく警備されている。今夜、この村から280名が国外追放され、サンフランシスコの中国船まで護送する。今夜追放される中国人の大部分は、中国に帰ることを望まず、米国に残ることを希望していた。そのため、逃亡を試みる中国人が村に火を放ったり、破壊したりする危険性があったため、強力な警備が朝からなされていた。儉約家である中国商人の多くは、セントルイスでの滞在中に、中国に帰国した後も十分に豊かな生活を続けることができるだけの財産を築いた。しかし、彼らは中国に帰りたくなかった。米国に残りたいと考える中国人は無数であり、彼ら

のずるがしこさは、何とかしてこの移民法の監督から逃れようとしていた。』⁴⁵

また、博覧会出展のためにセントルイスに渡米した中国人も逃亡を凶っていた。「博覧会会場でしっかりと警備されていた194人のうち3人が脱走しようと試みた。彼らは、逆の方に回転するようになっていた回転木戸を通り抜けることに成功し、彼らの逃亡に気づかれる前に込み合っている「Pike」に到着し、急いで街路におりた。しかし、警備員に追いつかれ、逮捕された。彼らは、3000ドルを超える米国と中国の通貨を所持していた。』⁴⁶ 中国人は帰化できず、移民も禁止されていたためセントルイス万博への渡米が米国入国できる最後の機会であった。万博の中国政府役員に対しても、米国入国委員は過剰な審査が行われ、副監督カールでさえ入国に際してその身分に不信を抱かれ、一時拘束されるほど米国の中国への警戒感は強かった。⁴⁷ 万博での展示は、植民地展示に代表されるように、人種差別を正当化する役割を果たしていた。欧米を基準としてより遅れた文化を持つ中国は、差別されてもしかたがない対象とされたのである。

日本は万国博覧会に初めて参加した時から、常に中国の出品物を意識し、中国の古代文明に関する物は賞賛するが、現在の出品物に対して常に辛らつな意見を述べていた。そこには、アジアには西欧に匹敵する文化があるという自負と、現代のアジアの盟主は中国でなく日本であるという意識があったからである。

「文明国人の美術的嗜好は清麗にして、野蛮国人の嗜好は濃厚こうむなるにあり、この二様の趣味の異なるものあるを聖路易万国博覧会の会場において確かめることを得たり、支那人は日本人よりも濃厚なる美術を好み、日本人は欧米文明国人よりも濃厚なるを嗜む、」⁴⁸ 人や国によって各趣味は異なるが、この二様の特長で文化の標準としても、大誤にはならないだろうと万博の出品物を比較して、欧米人、日本人、中国人の文明化の順列を明確にし、世界での日本人を位置づけていた。中国の報道も「日本が政府館の落成式典と茶会を催した。米国の官吏や著名人を多く招待し、大統領の令嬢も参列し、日本に対する米国の賛辞を聞くと尊敬にあふれていた。』⁴⁹ と述べ、米国が日本に好感情を持っているという印象を受けていた。さらに、「日本の展示場所に木刻の雛型日本地理標本があり、この標本に朝鮮や中国の三省が作成されており、旅順・遼陽の各地に日本国の微標が挿んであり、そこに日本の新領土と表記されていた。』⁵⁰ 中国人は、これを見た米国人に「お前はすでに日本人だ」とからかわれた。これは、日本が通運館に展示した「練紙製大日本帝国、韓国全部及び北清満州一部の地理模型」に毎日、日露戦争の最前線の場所に日本の国旗を描いたことを述べていると思われる。独立国でありながら日露戦争の戦場にされた中国と米国から賞賛される日本を比較して、中国は屈辱を感じていた。

「近代世界システム」に組み込まれた中国は、「辺境」に位置づけられ、経済的・政治的に「中核」に従属させられただけでなく、文化的にも従属させられた。そのため国際関係を反映していた万国博覧会では、世界最古の歴史を誇る中国の文化は、欧米諸国を基準とする文化により「野蛮」で劣っていると位置づけられた。「近代世界システム」のいくつかの国家は、中核—辺境構造の明らかに「中間」にある。すなわち、それらの国は、その国境の内部に、中核諸国家に関係した辺境的過程と近隣の辺境諸国家に関係した中核過程とを合わせもつものである。⁵¹ まさに日本は欧米諸国との関係では「半辺境」の位置にあるが、アジアの中で「中核」の位置を得ようとしていたのである。

4. おわりに

19世紀から20世紀にかけての欧米諸国の中国への進出は、東アジアの中国を中心とした「朝貢体制」を崩壊させ、東アジアも欧米を中心とする「近代世界システム」の中に組み入れることになった。このことは、西洋を頂点とした人種的・民族的位階制へ東洋が編入されつつあったことを意味していた。西欧化＝近代化のもとで開催されていた万国博覧会は、展示を通じて、非西欧人の劣等性を視覚的に確認させ、植民地主義を正当化する役割を担っていた。

日本は「近代世界システム」の中で押し付けられた役割を変えるために、いち早く西欧諸国と同様な近代化を目ざし、技術習得と近代国家日本のイメージ獲得を目的とし万国博覧会に積極的参加していった。一方万博に無関心であった中国は、万博初期から外国人に出品物の収集を委託していたため、西欧人が抱くエキゾチックなイメージを凝縮した展示を行っていた。この傾向は、中国が清朝皇族のひとり政府代表として派遣したセントルイス万博でも変わらず、西欧文化を基準とした万博において、中国は「静止した帝国」で価値的に低いものとみなされた。セントルイス万博の展示は、中国の神秘性で多くの観客を呼んだが、それはまた近代化を遂げようとする中国でなく、東洋の伝統的な中国への賞賛であった。

1880年から1900年にかけて「近代世界システム」が急速に拡張する過程で、万国博覧会に参加する国や地域が増加し、植民地展示も拡大していった。1904年のセントルイス万博が最大規模で、以後小さな規模の万博しか開催されなくなる。このことは、「1905年の日露戦争で、日本がロシアに勝利したとき、その勝利はヨーロッパの拡張が「逆転」し始めたものとみなされた。」⁵² という指摘と無関係ではないだろう。日本は、万博で中国の展示と自国の展示を比較することにより、日本が近代化した国であり、亜細亜の盟主であることを強調していた。⁵³ その背景には、日本を「中核」とした東アジアの地域システムを形成しようとする日本の思惑があった。

セントルイス万博の参加により、中国は世界での自国の位置が欧米はもとより日本にも遅れたことを認識させられた。近代化の必要性を痛感した中国の知識人は、近代化の最大の障害である清朝政府打倒を推し進めて行ったのである。

- 1 吉田光邦『改訂版万国博覧会—技術文明史的に—』日本放送出版協会、1985年、2頁。
- 2 Neil Harris , *All the World a Melting Pot ? Japan at American Fairs, 1876-1904 in Akira Iriye, ed., Mutual Images: Essays in American Japanese Relations*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1975, pp.24-54。三島雅博、博士論文「明治期の万国博覧会—日本館に関する研究—」神戸大学大学院自然科学研究科1992年。佐野真由子「文化の実像と虚像—万国博覧会にみる日本紹介の歴史—」『国際関係論研究』第9号、1995年。平野繁臣「人類の文明の表現としての万国博覧会」『国際交流』第19巻2号1997年。渡邊かよ子「1904年セントルイス万国博覧会における『教育』」『愛知淑徳大学論集』（コミュニケーション学部篇）第3号2003年。楠元町子「万国博覧会と異文化交流—1904年セントルイス万博の事例を中心に—」『異文化コミュニケーション研究』第5号2002年。等。
- 3 鈴木智夫「万国博覧会と中国—1851-1876—」『人間文化』第11号、1996年。
- 4 久本明日香「セントルイス万博と清末中国」『寧楽史苑』第49号、2004年。
- 5 Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System : Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteen Century*, Academic Press, 1974.(川北稔訳『近代世界システムⅠ・Ⅱ』岩波現代選書、1981年)
- 6 吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代』中央公論社、1992年、30-33頁。
- 7 松村昌家『水晶宮物語—ロンドン万国博覧会1851—』リプロポート、1986年。
- 8 吉田光邦編『図説万国博覧会史1852-1942』思文閣出版、1999年、33頁。
- 9 前掲『水晶宮物語—ロンドン万国博覧会1851—』185頁。
- 10 同上、185頁。
- 11 前掲『博覧会の政治学—まなざしの近代』70-71頁。
- 12 山本光雄『日本博覧会史』理想社、1965年、233頁。
- 13 渋沢栄一「航西日記」『渋沢栄一伝記資料』第一巻、渋沢青淵記念財団竜門社、1966年、508頁。
- 14 前掲「万国博覧会と中国—1851-1876—」69頁。 前掲『図説万国博覧会』149頁。
- 15 吉田光邦編『万国博の日本館』株式会社INAX、1990年、54頁。前掲『図説万国博覧会史1851-1942』38-39頁。
- 16 前掲「万国博覧会と中国—1851—1876—」70-74頁。
- 17 畑智子「19世紀世界の中の日本—セントルイス万国博覧会にみる文化交流とナショナリズム—」『外国学研究』（神戸市外国語大学外国学研究所）第44号、1998年、5頁。
- 18 前掲『博覧会の政治学—まなざしの近代』182-194頁。
- 19 前掲「19世紀世界の中の日本—セントルイス万国博覧会にみる文化交流とナショナリズム—」7頁。
- 20 吉田典子「1900年パリ万国博覧会—政治・文化・表象—」『国際文化学』（神戸大学国際文化学会）第3号、2000年、19頁。
- 21 『明治前期産業発達史資料204—千九百年万国博覧会臨時博覧会事務局報告上4—』明治文献資料刊行会、1973年、768頁。
- 22 同上831頁。
- 23 『明治前期産業発達史資料203—千九百年万国博覧会臨時博覧会事務局報告上3—』明治文献資料刊行会、1973年、486-488頁。

- 24 同上482-483頁。
- 25 St.Louis Public Library所蔵、Scrapbook, Vol.12,p113
- 26 前掲「セントルイス万博と清末中国」40頁。
- 27 Op. Cit., *The Modern World- System : Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteen Century*,『近代世界システムⅡ』281-283頁。
- 28 Ibid.,『近代世界システムⅡ』213頁。
- 29 Immanuel Wallerstein, *Historical Capitalism With Capitalist Civilization*, WW Norton & Co Inc (川北稔訳『史的システムとしての資本主義』岩波書店、1997年、104-105頁。)
- 30 並木頼寿、井上正弘「中華帝国の危機」『世界の歴史19』中央公論社、1997年、218頁。
- 31 彰澤周『明治初期日韓清関係の研究』塙書房、1969年、406-413頁参照。
- 32 *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.3, No10. August 1902, p.34.
- 33 Ibid., Vol.4, No2. December 1902, p.30.
- 34 農商務省『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第一編、241頁。
- 35 St.Louis Public Library所蔵、Scrapbook、Vol.12,p.116.
- 36 前掲『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第一編、257-267頁。
- 37 Timothy J. Fox and Duane R. Sneedker, *FROM the PALACES to the PIKE : Visions of 1904 World's Fair* Missouri Historical Society Press, 1995, p176.
- 38 「聖路易博覧会」『東京朝日新聞』1904年7月20日。
- 39 「聖路易博覧会」『東京朝日新聞』1904年9月6日。
- 40 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12,p.117.
- 41 「聖路易会場之国恥」『東方雑誌』第1年第7期、1904年、43頁。
- 42 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12,p.119.
- 43 Ibid., Vol.12,p.119
- 44 前掲『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第一編、297頁。
- 45 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12,p.118.
- 46 Ibid., Vol.12,p.119.
- 47 前掲「セントルイス万博と清末中国」45頁。
- 48 「貿易作振策」『新愛知新聞』1904年11月6日、名古屋商業会議所、山脇書記官の報告として掲載。
- 49 「聖路易会場要事 乙」『警鐘日報』1904年6月27日。
- 50 「聖路易会場之中国大恥辱」『警鐘日報』1904年7月27日
- 51 Immanuel Wallerstein, *The World Economy*, Fernand Braudel Center & The Research Foundation of the State University of New York, Essays selected from Review. (市岡義章訳『世界システム1 ワールド・エコノミー』藤原書店、1991年、22頁。)
- 52 Immanuel Wallerstein, *After Liberalism*, New Press, 1995. (松岡利道訳『アフター・リベラリズム—近代世界システムを支えたイデオロギーの終焉—』藤原書店、1997年、387頁。)
- 53 Carol A Christ, "The Sole Guardians of the Art Inheritance of Asia: Japan and China at the 1904 St. Louis World's Fair" *East Asia Cultures Critique* Critique 8,3 (winter 2000)675-709.